門前町に生きる

― 過去・現在・未来 ―

大師参りをする門前町の人々(大正末期から昭和初期)

第2回　お大師参り

毎月21日の弘法大師の縁日(月大師)に、成田山新勝寺の僧侶が先達になって、十善講(正式名は十善護国講社)が門前町の札所を巡拝し大師像を祀る習俗が続いています。門前町とその周辺を「新四国成田八十八カ所霊場」とするウツシ巡礼で、中興第九世の照融上人が天保10(1839)年の隠居後に推奨して始まり、門前町の七墓を巡る死者供養の性格も強かったようです。大師参りの十善講には、門前町の「成田組」と、在の「中印旛組」「茨城組」があります。4月は15日間の広域の札所巡りで「大まわり」といい、旧暦21日は「旧大師」で「茨城組」と「成田組」が合同で成田市中・北部、栄町など、新暦21日は「新大師」で「中印旛組」が成田市中・南部、富里市など、「成田組」が「新四国成田八十八カ所」を巡ります。今年の7月21日の蒸し暑い日に「成田組」に一緒に付いて歩いてみました。

午前9時30分に遍路の巡礼衣を着て新勝寺の大師堂前に集合します。正帳元の大野東介さんと副帳元の藤田榮子さんが中心で、大野さんは昭和60年から、藤田さんは平成10年から世話役を務めているそうです。今回は総勢6人で成田の方は2人でした。元々は成田の門前町の人々が中心で講員は直系に限っていましたが、現在では地元の参加は少なくなり、6年前から「茨城組」も一緒に巡拝することになりました。門前町とその周辺の35カ所を巡るのですが、参加者が高齢のため省略する所も増えています。

大師堂前で僧侶が巡拝の無事を祈って般若心経一巻を読経して出発します。境内の先師墓地に移動し、開白となり、観音経を唱えます。各札所では新勝寺から頂いた大師御影を尊像の祠の木枠に貼り付け、開経偈と般若心経の読経、光明真言、宗祖宝号<南無大師遍照金剛>を唱えて、回向します。小さな木魚を持っている人は打ち鳴らします。身内で亡くなった方がいる場合は、死後49日以内は死者の魂は屋根や棟にいるので往生を願って十善講と一緒にお参りして108カ所の仏像に戒名用紙を貼り付けて供養する慣行もあります。大師にあの世に連れていってもらう、地蔵に死出の道を案内してもらうといいます。巡拝は「成田市内八十八カ所地蔵廻り」ともいい、弘法大師も地蔵も混淆し、観音の信仰も重なっていて、全て民間の身近な救いのホトケでした。要請があれば、位牌供養、墓供養、仏前供養を行います。墓供養では、墓石に大師御影を貼って、墓前で読経し、極楽往生を願って阿弥陀陀羅尼を唱えます。仏菩薩の信仰は融通無碍です。

現在の十善講の様子

札所の接待が豪華で、寸志を頂くほかに飴や煎餅や飲み物などが提供され、あっという間に手荷物がいっぱいになります。結願は光明堂裏手の奥之院脇で、大師像を拝んで観音経を唱えて終了します。惜しいことにここの大師尊像は平成24年に盗難に遭いました。本当にせちがらい世になりました。本堂で奉告参拝し信徒会館で解散となります。

十善とは人間の行為を、身(からだ)・口(ことば)・意(こころ)の3つに分け、身の三種、口の四種、意の三種の悪行をせず善行を積むことです。難しい教義はともかく、苦労も多いが楽しみな婆と爺の仲の良い集まりのほのぼのとした雰囲気が身に染みました。次世代にも伝えて後世に遺しておきたい行事です。

(鈴木正崇)

編集後記

毎年、大勢の人たちでにぎわう下総ふるさとふれあい納涼まつり。中盤に差し掛かるころ、突然の豪雨で取材スタッフも会場近くの公民館に避難しました。雨が収まるとまつりは再開され最高潮に。一方でナスパ・スタジアムではプロ野球イースタン・リーグの公式戦。こちらは試合開始直前の豪雨で残念ながら中止になりました。市制施行60周年のことしは、これからイベントがめじろ押し。天候に左右されないことを願うばかりです。

平成26年9月15日号　No.1275

成田市のホームページ

http://www.city.narita.chiba.jp

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD(ユニバーサルデザイン)フォントを使用しています。

平成26年9月15日号／月2回　1日・15日発行／編集発行：成田市役所企画政策部広報課　〒286-8585 千葉県成田市花崎町760番地　電話0476-22-1111(大代表)